

「読書の秋」です。書物を読むことを「読書」と呼ぶ一方で、多くの人が読書論を展開し、「読書とは何か」を語っています。解剖学者の養老孟司氏は、著書『読む。生きるための読書』の中で、読書について次のように述べています。

「読書も役に立たない。立つと思う人は、ノウハウ本を読むであろう。だからノウハウ本は売れる。しかしそれは読書ではない。読まなくて内容も教えてもらえばいいからである。キングのホラーを読んだって、なんの役にも立たない。そんなことはわかりきっている。だからそれが読書なのである。読んだという行為を『自分に返す』しかないからである」

次に、文芸評論家の三宅香帆氏は、著書『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』の中で、読書と情報の違いについて論じています。三宅氏は、読書とはノイズ、すなわち歴史的背景や他作品との文脈、予期しない展開などを含んだ「知」を得る行為であり、一方で情報とは、そうしたノイズを排除した「知」を得る行為であると定義したうえで、次のように述べています。

「自分が遠く離れた文脈に触れること―それが読書なのである。そして、本が読めない状況とは、新しい文脈を作る余裕がない、ということだ。自分から離れたところにある文脈を、ノイズだと思ってしまふ。(中略) だから私たちは、働いていると、本が読めない。仕事以外の文脈を、取り入れる余裕がなくなるからだ」



## 「役に立たない」と思った本が 思いがけず自分を映す鏡となる

養老氏と三宅氏の見解には多少の違いは見られますが、共通しているのは、「役に立たないもの」あるいは「本人が必要としない」と考えているもの」が含まれているからこそ、それが読書であるという考え方です。純粹倫理の提唱者・丸山敏雄は読書について次のように述べています。

「良い書物を得ることは、さほど困難ではない。先づ、人物の伝記を読むがよい。これが一番てつとり早いことである。(中略) 成功者でも失敗者でも、総てが、先輩の尊い体験の報告であり、身を以て行つたよい教訓である。特に発明家や芸術家等の伝記によつて、教へられる所が多い。困苦にぶつかつて、百折不倒、刻苦奮闘、只、一貫不断的努力のみが、人に成功の栄冠を与へるものであるといふ人生哲学は、人物伝記を読むと、自らうち立てられて来る」

教育者であり求道者でもある丸山敏雄にとつて、読書とは単なる知識の習得ではなく、人との出会いそのものであり、その出会いを通じて自身を磨いていく営みでした。書物を通して多様な見識を深め、他者の人生に触れることで自分自身を見つめ直す。そうした心の練磨こそが、読書の本質的な意義なのではないでしょうか。一冊読んだからといってすぐに効果が現われるものではないため、読書は軽視されがちですが、今一度その大切さを見直したいものです。読書の秋、少し心を遊ばせながら、「役に立たない」と思っていた本の中に、新たな出会いを見つけてみてはいかがでしょうか。